

中国では「耄」になると 社会的責任がなくなる

陳 舜臣（作家） 多田 智満子（詩人）



「敬老精神は中国よりも韓国の方が強いですよ」陳 舜臣さん

に中央市民病院の岡本道雄さんも
この方は京都大学の前学長だった
んですが、私の家の前を通つて六
甲学院まで、朝早くからジョギン
グをしておられる。「あんた、ま
だ寝てるやろ」と言われた（笑）。

多田 今は北海道にいる息子も、
あの辺をよくジョギングをしてい
ました。

ところで陳先生は最近、どこか
へご旅行をされました？

陳ええ、一昨年はNHKの「シ
ルクロード」の取材で、イランと
トルコへ行きました。

多田 それは素晴らしい所へ行かれ
ましたねえ。

陳 ところが酒が飲めないんですよ（笑）。イランは非常
に厳しい禁酒国なんです。

多田 陳先生は六甲の山手にお住まいですが、私も護国
神社の近くです。六甲界隈には作家とか学者が多いで
すね。

陳 大阪フィルの朝比奈 隆さんもいらっしゃる。それ

飲めますね。

陳 イランでも一年ぐらい前までは外国人ならホテルでビールを飲むぐらいは構わなかったのですが、今は全然ダメです。『イスラミックビール』って、ビールみたいなものはあるのですが、アルコール度はゼロ（笑）。カラメルで色をつけています。泡がちよいと立つだけ（笑）。

多田 アメリカには昔、禁酒時代があつて、ずい分と密造酒が盛んだつたようですが、イスラムではどうですか。陳 やるんですよ。家に瓶が置いてあって、何をやつているのかと聞くと、酔をつくっていると言う。酔になる前に酒になるんですよ（笑）。捕つたらムチ打ち八十死刑になります。子供だとムチで十回も打つと死ぬと言いますね。

多田 それは大変な刑なんですねえ。

ところで、陳先生が読売新聞に連載されている小説、「曼陀羅の人」を面白く読ませていただいているのですが、本当に興味津々たる作品ですね。

陳 空海は、ちょっと異常なときに唐へ行つてゐるんとりあげてゐるんです。唐へ行つたときのことです。多田 あれは陳先生でないと書けない題材でしょう。私は唐の事情など何も知らないので、とても面白く読ませていただいています。

多田 空海は、皇帝側近の王叔文が実権を握つていたほんの短い間です。皇太子の墓の指南をやつていた人が権力を握つたわけですね。ところが、そういう人が庶民の痛みが分つてゐる。そこに矛盾があるわけです。

杜甫の詩は科挙の試験の参考書

多田 中國には科挙の制度がありましたが、いろんな地方から秀才を集めると意義があつたんでしょうね。

陳 そうですね。六朝までの貴族社会では、日本と同じで門閥によつて登用をしていました。それが、隋が天下を統一した頃から貴族社会が崩壊した。別の登用方法を考えないといけないとき、試験という方法が一番いいわけですね。科

挙の試験は暗記の種目ですから、それが出来る階層は限られて来ますね。朝から晩まで働いて、しかも電気のない時代ですからね。

多田 今の眼から見ると著しく科目が片寄つてゐると言ひますか、そういう感じがしますね。こういう文学的なことに才能のある人が果たして政治家としてはどうなかな、と言う感じがしまして。

陳 詩をつくるわけですが、中国の詩は律詩と言いまして、対句にしないといけない規則がありますね。だからバランス感覚はあつた



「昔の中国は長老政治だという感じがしますね」多田智満子さん



のじやないですか。杜甫は律詩のうまい人でしたから、科挙の参考書としてよく読まれたのかも分りませんね(笑)。

多田 でも、やはり大政治家で大詩人という人はいないようだし、どっかですか。

陳 大政治家で大詩人というのは三国志の魏の始祖である曹操ぐらいですね。

多田 詩の才と政治の才は、ある程度は重なるところがあるのかも分りませんね。

陳 ただ「詩經」の解釈も時代によってずい分と違うわけです。完全な恋愛詩なのに、あれは賢人を慕う詩であると解釈してしまう(笑)。それを是正したのが朱子ですね。

断片しか残らなかつた中国の神話

多田 私、この頃、神話にちょっと凝つていてね。中国の神話はよく知らないのですが、「山海經」とか、

ああいう奇妙な本を読み漁っているんですよ。陳 「山海經」は、現存するのは断片ですね。魯迅が好きだったんですよ。

多田 本当に面白いことが書いてあります。中国人は実

際的で常識的と言うか、プラクティカルな人間だと言われますが、ああいう本を読むと、とんでもないという感じがしますね。何て言いますか、道教の伝統といいますか、道教は現実の彼方へ、幻想の方へのめりこんで行くという傾向がありますから。

陳 中国の神話には体系がないんですね。それは初めか

マルコ・ポーロは『色目人』

多田 陳先生の「曼陀羅の人」に出ていますように、長安にはずい分といろんな宗教のお寺があったのですね。陳 ゾロアスター教(拜火教)も来たし、マニ教も来ていましたし、イスラム教やキリスト教も来ていましたね。だから非常に国際的な宗教関係の中についたんですね。

らなかつたんじやなくて、あつたのがなくなつたんです。神話とは、一つの国の成り立ちを説明するものでしよう。だから殷の時代には、殷の成り立ちを説明した神話があつたんですが、周の時代になると自国の神話を創つて、周が亡びると秦の神話が生まれる。だから体系なく残つているんですね。

多田 私もそう思います。神々の世界にも人間の世界と同じように政権交代があり、それはギリシア神話にもありますね。初めて土着の民族の神話があつて、あとからバルカン半島の北部からいわゆるギリシア人が南下して来て、自分たちの神々を立てる。そういう神々の興亡が、神々の世代の交代として、きちんと神話の中に反映されていますね。中国の神話の場合は、それがつき崩された形のままで残つて、あとで神々の系譜がまとめられなかつたという恨みがありますね。

陳 そうですね。秦の始皇帝以降はラジカルな世界になつてしまますね。最早神話を必要としない時代です。

多田 陳先生の「曼陀羅の人」に出ていますように、長安にはずい分といろんな宗教のお寺があったのですね。陳 ゾロアスター教(拜火教)も来たし、マニ教も来ていましたし、イスラム教やキリスト教も来ていましたね。だから非常に国際的な宗教関係の中についたんですね。

陳 そうですね、その当時は。

多田 一番主流だったのは何ですか。

陳 仏教ですね。だから漢の武帝の排仏運動は、排仏だけじゃないんです。道教が凝った皇帝が、道教以外の宗教を弾圧したんです。仏教だろうが、ゾロアスター教だろうが、全部を弾圧したんです。

多田 松本清張さんは、日本にゾロアスター教が入ってないとおっしゃっていますね。

陳 ええ。二月堂のお水取りはゾロアスター教の風習だと言うんですが、やはり、人間である限りは自然を崇拜するのは当然だし、とくに火というものは有難いものだから、尊ぶは何もゾロアスター教に限らないですね。古代史については資料が少ないのでから何を言つても構わない（笑）というところがありますね。

多田 だから割と素人の方々が研究されていますね。

陳 耶馬台国にても「魏志倭人伝」に何行かの記述があるだけですからね、根本資料は。それをどう解釈するかの問題ですね。もっと古い資料が出て来たら解決するかも分らない。それが出て来る可能性はあると思います。トルファンからも三国の資料が出て来たのですが、残念ながら吳が出て来て、魏はなかった。それが出て来れば耶馬『臺』国か、耶馬『壹』国かがハッキリする。私は耶馬臺国が正しい、壹は誤りだと思っています。

多田 耶馬台国は九州か、大和かということで、カンカンガクガクで争っていますね。

陳 魏の鏡が発掘されるというものが、大和派の根拠です。

卑弥呼の使者が魏へ行つて貢つて来るという記録があるんです。鏡は近畿からばかり出て、九州からは出ないところが、この頃はどうもあれは日本で造ったということがになっている。周囲にギザギザのある鏡は中国では出て来ないんです。一枚も出でていません。

多田 その頃には日本でも鋳造技術が発達していたんですね。鏡は近畿からばかり出て、九州からは出ないところが、この頃はどうもあれは日本で造ったということがになっている。周囲にギザギザのある鏡は中国では出て来ないんです。一枚も出でていません。

多田 うん、うまいものですよ。

多田 日本人は真似が上手ですから。

陳 それは日本だけに限らないで、ツングース系の人はみんなうまいですね。

多田 日本人つてツングース系ですか。

陳 いろいろ混つていますけれど、支配的にはツングース系じゃないですか。

多田 やはり騎馬民族……。

陳 ではないですね。モンゴルは騎馬民族ですが、ツングースはどうらかと言うと狩猟民族ですね。狩り場があるので、あっちこっちと動いたりはしますが、遊牧民族に比べて定着性があります。

多田 中国で遊牧民と言ふと、元ですか。

多田 ええ、元です。

王朝として定着すると言うのは、どういうんでしようね。

陳 権力を持って定着するんですが、農耕を非常に軽蔑する。中国文化に同化されないわけです。さらに実能力、国家経営力がない。それを色目人にやらせた。色目人はイラン人とトルコ人のことですね。



多田　“色目”ってどういう意味なんですか。

陳　いろんな人という意味で、その人たちに権力を与えた。代官をやらせたわけです。

イラン人などには経済観念、実務能力がありますからね。

マルコ・ポーロも、彼はイタリア人ですが、色目人の一人です。

親の前では禁煙“禁メガネ”

多田　漢時代のことを書いた本を少し読んだのですが、中國人は晩成と言いますか、一人前になるのが遅いなあと思つたんです。官吏になる士大夫階級の人たちが官職につくのが、ものすごく遅いんですね。

陳　漢の時代の官職のつけ方は、一年間に二人、地方長官に推せんさせるんです。これは義務です。

多田　二十代や三十代の働きざかりのときには家にいて親に孝養を尽くしたり、友人たちと交際をしてて、官職につくのは四十ぐらいだと書いてありました。

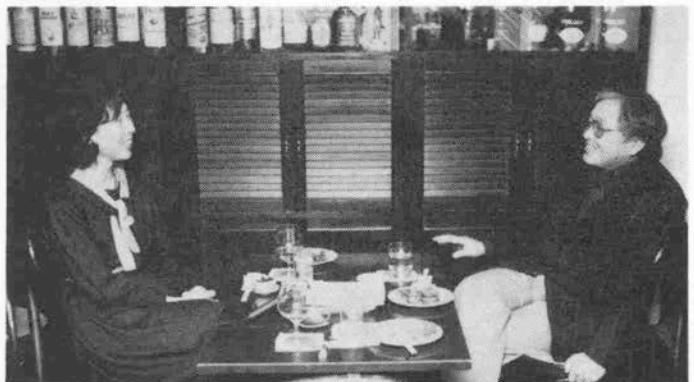
陳　もっと年がいって七十ぐらいの人もおりますよ。

多田　まあ、どうしてなんでしようか。

陳　結局、地主官に推せんの義務があるので、変な人を推せんしたら、その人の罰点になるんです。血氣にはやる若い人を推せんして、問題を起こされると責任をとらされる。だから年とて辛抱強い人を推せんすることになるんですね(笑)。

多田　長老政治だという感じがしますね。

陳　そうですね。ただ将軍だけは年が若い。大てい皇帝



中国の歴史を遡って対話はつづく

の外戚ですね。皇后の弟とかね。

多田　中国には年寄りの段階が、“耆々”とか“老”とか“耄”とか何段階もあって“耄（八十歳くらい）になると社会的責任を

問われなくなるんだそうですね。

陳　存在そのものが值打ちになるんですね。

多田　本当に敬老精神がさかんなのですね。“老”という字に非常に敬意がこもっていますでしょ。

陳　古い友達には年齢に関係なく“老”をつけてますね。たとえば、非常に親しい李さんなら“老李”と呼ぶ。

多田　「西遊記」の中に、孫悟空が自分のことを“老外公”、お爺様だぞと言つていばるところがありました。

陳　身分が上だと言うことです。

多田　ジエネレーションが上だと言うことは、無条件にえらいと言うことです。

陳　それは絶対的なことです。

多田　韓国も敬老精神は強いようですが中国よりも、伝えられた韓国の方ですね。お父さんの前ではタバコを喫わないですよ。

多田　そうなんですってね。親の前では、こそそそと手でかくしてタバコを喫つているつて、私の主人がびっくりしていました。

陳　今ではこういうことは余りないですけど、厳格な家ではお父さんの前でメガネを外しますよ。

多田　メガネも失礼ということなのです。

陳　そうなんです。つまり、親が五体満足に生んでくれたので、眼を悪くしても、五体満足ですということで、なるんですね(笑)。

多田　本當ですか。今の日本なんか少しは見習った方がいいみたいですね(笑)。

(「六甲坂道」にて)



私達『壁の穴』のスタッフは、
「サービスを計るものさしは、ない」

と考えております。

お客様のどんな御要望にも、お答えできる

そんなサービスを心掛けております。

もし? 「ものさし」があるとすれば、

それは、きっと、endlessなものになるでしょう。

spaghettiを通して、私達の真心も御試食下さい。

お待ちいたしております。

東京・渋谷 スパゲティ専門店

Spaghetti 壁の穴

三宮店 中央区三宮町1-5 サンロイヤル神戸10F (さんプラザ) TEL 078-332-4551 営業時間11AM~9PM 第1・3月曜休

花もみじ 絵辯 新あたらし 光江司

母は何時も忙しかった。我慢出来ない程空腹になると、私は何時も母が仕事をしている美容室のドアを開いた。

「先に食べていい？」

「いいわよ」

母は振り向きもせずに返事をする。そして顎を引き、

お客様の髪を巻きつづける。私は台所にもどり、小さな鍋を二つ、コンロにかける。

「お湯が沸いたけど、お母さんのラーメンも作つたげようか」

「今、手がはなせないから、かおる一人で食べなさい。お母さんはいいわ」

「済みませんねえ」

お客様が気を使つて母に謝つている。

「いいえ、いいんですよ、それより奥様こそ、お腹が空いたんじやありませんか。すみませんねえ。もうぢきですから」

そんな母の声を聞きながら私は一人でラーメンを食べ

る。私の家には時計はいらなかつたのだ。整理籠箱の上の、青い目覚し時計は、朝、学校に行く時しか、必要がなかつた。だのに、私も母も、その時計が一分遅れても進んでも気になつた。今、それを思うとおかしくなる。

何時見ても母の腕は動いていた。鍼が光るとまるで魔術師見ても母の腕は動いていた。鍼が光るとまるで魔

法にかかつたように髪がこぼれる。肩を滑り下り、床に散らばる。床に落ちた途端に髪は光を失い、垢まみれによごれ果てる。鉢の、あの冷たい光りが髪の生命を吸い取るのだろうか。

「かおる掃除をして頂戴」

母はよく私にそう言つた。床に散らばつた髪を私は不器用に集めはじめる。汚なくて、そして魔物のように不気味な髪が床を滑つて逃げる。母は何時も私に背を向けていた。私は返事をする時でさえ、母の目は鏡の中のお客に向いていた。櫛を指にはさみ、お客様の髪に手をそえたまま、母は返事をする。

「かおる、宿題はすんだの？」

何時頃からそうするようになつたのか風呂上りにかならず天花粉をはたく私を、洋は何時も不思議がつた。

「それ、赤ん坊につけるものなんだろう？」

「そうよ。赤ん坊のおムツかぶれにつけるの」

洋は呆れ、声を上げて笑う。鏡に向かい私は思いきりたつぶりと天花粉を胸もとにはたきこむ。サラサラと乾いた、清潔な香りが私を一杯にする。天花粉の香りは何時も私に故里の夏の夕暮れを思い出させた。夕星が光りはじめると、町は水の景色に姿を変える。空も、風も、しつとり水の色に沈んだ町を、子供達が通りすぎる。サ

ツパリと浴衣に着かえ、両親に手を引かれて歩いてゆく。あれは盆の灯籠流しの夜だつただろうか。私はよく家の戸口で、そんな光景を見ていた。子供達が通りすぎたあの道を、かすかに天花粉の香りが流れていた。風呂上りの火照つた肌を、その子のお母さんは、大きなバスタオルでくるみ、何度も優しく拭いたにちがいなし。

「さ、天花粉をつけなくっちゃ」

子供の背中で蝶結びに結んだ兵児帯がはね上がる。両

親に手を引かれた子供が、天花粉の香りを残して遠ざかって行つたトンネルのような夏の町筋。天花粉をはたきながら、私は何時もそんな光景を憶い出す。洋にこんな私の心がわかつただろうか。父のない娘の、どこかもぎ取られた心の裂け目が理解出来ただろうか。

父の影はどこにもなかつた。私には父のことを母に尋ねた記憶がない。尋ねてはいけないと一人で噛み殺してしまつたのか、それとも、生まれた時から存在しない父を、意識さえしなかつたのか、もう憶い出せない。

私は母によく似ていた。母も私と同じような、滑らかな小麦色の肌をしていたし、彫りの深い整つた顔立ちだった。だが、中学生、高校生と背丈がのびるにつれて、私の容貌ははつきりと異国の血を際立たせはじめていた。



7.7.

どれ程敏腕のデザイナーが作った服を着ても、インドの婦人がまとうサリー程には似合わなかつたと思う。私は鏡の中の自分を、長い時間見つめることがよくあつた。癖のない髪を思い切り強く後で束ね、母のイヤリングをつけたことがある。スリップの紐を外して青いカーテンをサリーに似せて身にまとつた。私は自分の姿に息をのんだ。異国の血がしづもつてゐる大きな目や、頬の線を、自分でも美しいと思ひながら、打ちのめされた。不思議な興奮にゆすられ、私は母の鏡台を開け、アイシャドウをまぶたに塗り、くつきりと唇を染めた。部屋は青葉の影でよどんでいた。沼のような青い鏡の中に、一人の異国の少女が立つていて了。

あの頃私は競技部の上級生達に、よく呼び出された。彼女達は、自分より背の高い下級生の私を、憎しみこめてにらみつけた。

「態度が大きいよ。何様のつもりなの？」
私は返事もせず、平然と彼女達を見下した。

「生意気つたらありやしない」
私の背後で、何時も私につきまとつてゐる女の子達が、おろおろしてゐるのがよくわかつた。私は少しも動搖しなかつた。何時も男の子達に鞄を引っ張られた私には、

こんなことは何でもなかつた。私にはわかつてゐた。彼女達をつき動かしている私への憎しみは、男の子達と同じものだということが——。彼女達にしろ、男の子達にしろ、自分でも、自分をつき動かすものの正体がわかつていいのだと——。

小さな虫を、羽をもぎ、足を一本一本、引

きちぎるよう、何かが私への憎しみと嫌悪をあおるのだ。肌の色が違うことが、何故、彼等を残酷な思いにつき落とすのか。私にだつてわからない。

上級生達は返事もしない私に一そく憎しみをかりたてられる風だった。だが、顔を上に向けて怒る姿勢には、自分でもうんざりするのか、怒りながら引き上げるのが常だった。

「何で人達——」

同級の女の子達はそろって蒼ざめていた。まるまると柔らかな身体をした女の子達。どの子もまるきり勉強をしない。何時も私にすり寄り、媚びるようにつきまとつて離れない。彼女達は私が露程の友情も持たなかつたこと、友情どころか軽蔑さえしていたことを、気づきもしなかつた。

私は一体誰の子なのだろう。そして、どこの国の血が、私の身体を流れているのだろう。母は若い頃、神戸で小さな商社に勤めていたのだと友子おばさんが教えてくれたことがある。それ以上のどんな話も友子おばさんは私に話さなかつたし、母も又、父について、何一つ話そうとはしなかつた。父の話を、もし母が話そうとしたら、私は顔を振つて逃げ出したかも知れない。時として、私を生み、たつた一人で育てた母に美しいものを空想したこともある。母の愛の結果が私だったとしたら、私は自分を押しひしぐ冷たい闇から逃れることが出来ると思つた。だが母は父を隠しとおした。そしてそうすることで、母が背負っている間に、私まで引きずりこんだ。

「東京に行くわ」

私は母に言つた。

「大学へ進むんじやなかつたの?」

「働くわ。一人で——」

母は暗い目で私を見た。

「もう沢山。東京に行くわ。知つた人が一人も居ない所に行くわ。誰一人知つた人の居ない所で思いきりのびのび生きるわ」

私は勝ち誇ったように言い放つた。

「私みたいな混血児が居なくなつたら、お母さんは自由でしょ。インド人のお姉なんて言う人誰も居なくなるわ。一人になつていい人見つけなさい。いい人見つけて幸せになつてよ」

母は凍つたように表情を動かさなかつた。それが私を荒々しく煽つた。

「インド人、インド人つていじめられるの、もう沢山。石投げられて頭に怪我したのお母さん知らないでしょ

う。五年生の時よ。三針縫つたわ。でも家の前で包帯取つちやつた。ほら禿になつてる」

はじめ母は表情を崩した。私は自分の言葉に興奮し、押さえようもなくなつていた。

「もうこのあたりでお母さん、自由になりなさい。人並みに幸せになつてよ。私みたいな子供は捨てちやいなさい」

あの時母はどんなに傷ついただらう。どれ程貌く、針のようになつて母を傷つけても、傷つけ足りない気がした。母を傷つける言葉で、私は自分の心も裂いていた。

自分の心もザクザクとひび割れながら、同時に母が気弱く涙を見せてくれるのを、ぼんやり期待していた。だが母は固い表情を、曇らせもしなかつた。

「いい勤め先があるの?」

私は驚いて母を見た。

「先生に頼んでおくことね。いい勤め先を——。服を作らなくつちや」

物憂そうに母はそう言つて外を見た。

窓が青い。

冴え冴えと青さが凍りつき、そこだけまるで水底のように見える。星が出ているのだろうか。星が窓をこれ程青くしているのだろうか。頼りない、ほんのひとかけらの光りが、何百年もかかるに届いたなどと、どうして考えることが出来るだらう。考えるだけで身体中が

透明になつてしまふような、そんな長い時間を、私は想像さえ出来ない。だが光りが通つて來た虚空ならわかる。その虚空の恐ろしい静寂ならわかる。それが私を縛る。疼くように切なく、私をたぐり寄せる。ひとかけらの明りも、音もない、真暗な虚空——。隕石が飛び交い、毀れ、錆びつき、無残な残酷と化した衛星のかけらが、音もたてずに廻りつづける闇の空間——。それが私が引きつける。

やがて夜
があけるだ
ろう。窓が

この青さと
一枚、一枚
脱いで行つ
て、明るさ

が部屋の中
を何もかも
むき出しに
した時、私は
は狂わずに
いられるだ
ろうか。二

人で過した
時間のいろ
んな断片
を、今なら
洋は、持つ
ている。

横たわる
石のように
闇の底に沈
んでいるけ
れど、私は
は洋の顔が

わかる。洋はまだ私が何十回も見つめたとおりの、子供のような寝顔をしていてるに違いない。だが、太陽がのぼつて、この部屋に真昼の白さが戻った時、洋はどんなものを見せるのだろう。始めて事務所に顔を出した時の、気弱そうな顔に似ているだろうか。それともチーフの説明に、うん、うんとうなづいてる時と同じ表情をしているだろうか。それらを死はどんな色に塗りこめたのだろう。それはもう私の知らない洋だ。それは私と一緒にない時——私は別の世界に生きていた時の洋に違いない。私には見せなかつた。洋のほんとうの顔がきっとそこにあるのだ。

洋は何時もどこか頼りない様子をしていた。始めて事務所に顔を出した時、洋はおどおどしていて、私と同い年だというのに、二つも三つも年下の青年に私は見てしまつた。

「あのう田賀さんはおいでになりますか？」

「今、出かけています」

「計算機を操っていた私は顔も上げずにつっけんどんに

答えた。

「何時頃帰られるでしょうか？」

「何時頃か、わかる？」

私は隣席の幸子に尋ねた。

「わかる筈ないじやない？ あの人鉄砲玉だもの」

彼は顔を赤くした。うつ向き、身体を揺すつた。

「何か用事なの？」

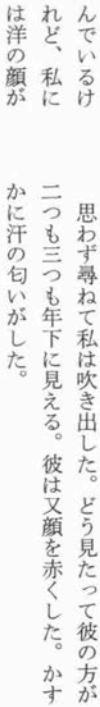
「田賀さんに一時に来るよう言われたから」

「ああアルバイトなのね。前の人代りね。お友達？」

「先輩です」

「どっちが？」

思わず尋ねて私は吹き出した。どう見たって彼の方があつも三つも年下に見える。彼は又顔を赤くした。かすかに汗の匂いがした。



田賀が帰るのを彼はじっと坐って待っていた。背筋を伸ばし、両方の目を閉じ、まるで座禅を組んでいるようにならぬ。その姿勢を彼は田賀が帰るまで崩さなかつた。

私が勤めている家具会社の宣伝用写真を撮影する田賀の助手。そういえば聞こえはいいが、そのための家具運び——それが洋の仕事だった。製品を収めたデパートの家具売場に応接セットを並べ、インテリヤを配置し、田賀の命令どおりにライトを当てる。それはかなりの重労働だったし、おまけに凝り性の田賀は何度も家具を並びかえさせたり、撮影にも時間をかける。学生のアルバイトを使つたが誰も三ヶ月とはづぶなかつた。その仕事を洋は黙々と一年つづけた。眞面目なだけが取得といつたからこそ、従順に働くのだが、仕事の要領はお世辞にも良いとは言えなかつた。短気な田賀はそんな洋を容赦なくどなりつける。田賀の怒声の聞こえない日はなかつた。

「田賀さん、少しきびしすぎるわよ。可哀そうよ。又辞めちやつたら困るのはあんたよ」

幸子が或る日田賀につつかつた。

「聞いているこちらまで氣分が悪くなるわ、朝っぱらから

どなり散らして、少しは考えてよ」

田賀は当惑した様子で返事をしなかつた。

「うちも商売ですからね。お客様に聞こえたらどうするのよ」

「すみません」

その時洋が言つた。

「僕がもたもたするから、すみません」

幸子は驚いて洋を見返つた。

「あんたが謝ることないわよ」

洋は長身をごごめるようにうつ向いていた。

夏休みを帰省せずに洋は働いた。

「今月はうんと入っているよ」

給料日、部長が笑いながら給料袋を洋に渡した。彼はまるで卒業証書を受取るように丁寧に頭を下げてそれを受取つた。

「お、厚いじゃないか」

田賀がのぞきこんだ。袋を開けるなり洋は笑顔になつた。
「わあ、主任、飲みに行きましょう。今夜は僕におごらせて下さい」

「おい、おい、無理するなよ」

「今夜はおごらせて下さい。部長さんも、大原さん達も一緒にどうですか」

「おごる、おごるってあの子、バーの飲み代幾ら位かわかっているのかしらねえ」

幸子が私に耳打ちして笑いだした。結局部屋全員が部長の行きつけのバーで飲むことになつた。

何時も口の重い洋が、アルコールのせいかよくしゃべつた。時々方言が混つた。祖母の住む村の老人達が話す言葉にどこか似ていた。バー全体を湿りを帯びた光が包んでいた。酔いが頭の芯を溶かはじめ、光りが時々陽炎のように揺れた。

「君は実にうますぎて飲むんだね」

不意に部長が肩を押えた。彼は私の隣に腰をおろした。幸子は洋の方に身体をねじ向けるようにして話している。田賀と洋と幸子と、三人は時々はじけるように笑つてゐる。

「事務所で見る時は別人のようだ」

私は黙つて星のようなチヨコレートをつまんだ。

「何だか吸いこまれそうになる」

ママが前に立つた。

「お知り合い? 部長さんも隅に置けないわ」

「おい、おい。うちの女の子だよ」

ママが驚いて私を見た。

「本當なの? 勿体ないわ。この人一流のナイト・クラブに出してみなさい。きっとナンバー・ワンになるわ。きっとそうだわ」

バーのほの暗い光線の中では、私の浅黒い肌と、線の強い顔立ちが、外人の女のよう陰影を持つに違ひない。

「きれいな方ね、凄いみたい——」

ママはほんとうにうつとりと私を見た。悪い気持じやない。私はグラスをあげた。

(つづく)

神戸つ子と
出会いの時



いかけなし

上 小 小 楠 貝 鴨 柏 嘉 嘉 金 小 小 岡 牛 榎 石 石 石 乾 青 朝
林 泉 磯 本 原 居 井 納 納 井 野 根 嶋 尾 並 阪 野 野 木 木 奈
英 德 良 憲 六 健 穀 正 元 一 真 吉 正 春 成 信 豊 重
一一 平 吉 一 玲 一 六 治 彦 夫 造 忠 朗 一 生 明 一 彦 雄 隆

直外竹津高陳田田田武淹滙角砂塙新司白佐坂後
木島馬高橋 辺中宮田川南田路谷馬川藤井藤
太健準和 舜聖健虎繁勝清猛重義英遼 時末
一之 一太 太
郎吉助一孟臣子郎彦郎二一夫民孝夫郎渥廉忠二

淀行元百村光宮宮松松福野西成南難中
川吉永崎上田地崎井井富澤村瀬部波西
長哉定辰正顯襄辰高一芳幸 香圭
二郎司三郎雄男郎美功梅還勝
正雄治女女會議神戸青年百店会

★発行にいろいろお世話いただいた方々
用意　監修　著者　二

神戸ポートピアホーテル
ヌードポートホーテル
ホテル神戸
神戸ワシントンホテル
グリーン三宮センターラ
ホテルタワーサイドホテル
サンエンドウホテル
雅叙園ホテル
六甲オリエンタルホテル
六甲山スカイヴィラ
ホテルグラザ(大阪)
ボレス水戸
神戸国際会館PG
神戸文化ホールPG

シネマガイド
兵庫県民会館
神戸市港湾博物館
神戸市中央市民病院
そごう神戸店美術画廊
ギャラリー1・ド・ラ・ベ
ギャラリーワークエス
ファミリアーナ野坂ハウフ
がれりあ馬堀乃
ブティック魔女
ファミリー・マンズポート
テルミー

れんが亭
神戸館
トム・キヤンティ
ガストロノミ
ヤマト化粧品店
キヤノン
にしむら珈琲各店
ハイジ芦屋店
ロビンソンフット(大阪)
ステーキハウス神戸っ子(鳥取)
クラブさら
珠

1年分 5500円
郵便振替口座 神戸45196

★神戸市兵庫区	芸亭
神文館メトロ店	★西宮市
隆書房	みどりや書店
漢口堂書店	夙川書店
かもめ書店	アイビー書房
合城屋書店	華文堂
★神戸市垂水区	大盛堂書店
岡本書房	シオサイ
木東館長門店	★宝塚市
秋田百文館	川瀬書店
高尾屋書店	宝塚書店
★神戸市須磨区	キリン堂書店
源氏書房須磨寺店	★芦屋市
博文書房	吉屋宝鑑館
★神戸市垂水区	大昭文堂
源氏書房須磨寺店	木村書店
博文書房	ブックスハルミ
廣文館	★加古川市
広文館 明舞館	ブックスアルフ
日東館垂水店	吉村書房
ブックスイカリ	詳文館
漢口堂市北区	★姫路市
漢口堂西鈴蘭台店	
★大阪市	
紀伊國屋書店梅田	三耕堂
誠心堂書店	

★今年は「世界ヨミニケイン」の年です。今年は「世界ヨミニケイン」といわれてゐる。社会学のヨミニケイションをおなし、からむ、街でつけるのが小説の神戸といふのは国際都市を標榜してゐるのだから街をわかれも腰をすえて、国際交流に力を尽さねばならないことを強く感じる。掛け声だけに終らなくなつて、よう提案と行動をすればならない。小泉康夫大いに酔が廻る。出会いの瞬間に大切にしたい。
★新企画・多田智鶴・午後の対話をスタート。第一回は陳舜臣先生との中談。毎回、この一人者を相手に多田先生がどういう話を聞く開されるか、実に興味津々である。
大いに期待して欲しいへ佐井裕勝
★が意外と多く、日本酒と女性は性交関係が良いようだ。ただし美味しい酒の肴が必要、只今研究中。・岡田虔



快適な住まいへのインフォメーションNo.8

これから、住まいも
ビジネスの舞台になる。

住まいの社会性——

私たちは、これから時代、ビジネスとの関わりを大切にすべきだと考えています。

仕事上の客を家に招き、もてなし、時には泊める——このような傾向の高まりに伴い、従来、住まいが関わってきた親類や友人等の「内輪の社会」に、今、主人を通じての「ビジネスの社会」が加わりつつあります。具体的には、客用の寝室やバスルームはもとより、プロの料理人による格別な料理も可能な充実したキッチンやフォーマルとファミリーの2つのリビングを設ける等々、客と家族、それぞれのプライバシーを守つた、小さなホテルとしての機能が求められてきています。私たちは、こうした「住まいが担う社会性」の変化に着目。これからも住まい、創りの大切なポイントのひとつと考えています。

快適さを支える部分にこそ注目していただきたい——ダイヤシステムハウ징は自信をもって住まいをお届けしています。



 ダイヤ システム ハウジング 神戸

神戸市中央区磯辺通4丁目2-20(神戸ビル401) ☎ (078) 232-3281
夙川モデルハウス／西宮市樋口町(夙川住宅公園内) ☎ (0798) 72-4041
千里モデルハウス／千里万博公園(千里住宅公園内) ☎ (06) 877-2718

本社／ダイヤ システム ハウジング株式会社
尼崎市昭和南通3-1(第2松本ビル) ☎ (06) 413-2551㈹

快適な住まいへのインフォメーションをテーマに、12回シリーズで展開。私たちの住まい創りの理念をご理解いただきたいと存じます。



スクール生
募集中!!

新学期から
始めてみませんか？

★一流の講師陣が揃いました。

●剣道、杖道、居合道、柔道、
空手道、合気道、少林寺拳法、
太極拳

●ヨガ、クラシックバレー、ミ
ニバスケット、親子体操、幼
児体操、婦人体操、バトント
ワーリング、小学生体操、ジ
ャズダンス

お問い合わせ・お申込みは

☎078(841)1084

神戸市灘区新在家北町2丁目

駐車場（100台）あり



まいあがれスポーツごっこ
SPORTS CLUB ROKKO
六甲体育馆